

【研究ノート】東京2020大会に見る成果と問題点

小倉和夫

東京2020パラリンピック競技大会（以下「2020大会」と略す）は、コロナ禍での開催であり、ともかくも開催し得たことは、日本国民の結束とコロナ対応の成果を間接的に示したことに加え、障がい者スポーツ界全体にとり、国際的な意義があったと考えられる。

また、無観客とはいえ、大会の開催自体が、国民の障がい者スポーツへの関心を高める効果があったことは疑いない。

他方、日本選手の活躍ぶりについては、幾つかの指標のもとに評価することが適当であろう。

日本の参加選手の総数は、自国開催であっただけに、過去最大の254人に上ったが、メダル獲得数を選手数で割った指標を見ると、ロンドン大会11.9%、リオ大会18.2%に比べて20.1%であり、自国開催の利点を十分生かしたとはいにくい¹。

また、メダル獲得数は、全体として、ロンドン16個、リオ24個に比べて、51個と遜色ないが²、目標としていた、金メダル20個、国・地域別メダルランキング7位以内³（東京大会での実績は金メダル13個、メダルランキング11位）には届かず、ここでも地元の利点を生かしきれたとはいえない。

競技別に見ると、大きく躍進したものとしては、車いすバスケットボール男子（リオの9位から東京は2位）があるが、他方、ロンドン（金1個）、リオ（銀1個、銅3個）と比較して成績がふるわなかったものとしては柔道（東京は銅2個）などが挙げられよう⁴。

ジェンダー別に見ると、日本人参加選手の男女比率は、ロンドン、リオそれぞれ66.4%対33.6%、65.2%対34.8%に比し、今回は58.3%対41.7%であり、女性の参加率の上昇が目立った⁵。

開閉会式については、障がい者アーティストの参加が目立ち、また、パラリンピックらしい、ほのぼのとした雰囲気の中でチャレンジする精神がよく伝わってきたことなど、総じて好評であったといえよう。他方、障がいの存在を、飛行機の片翼の欠如によっ

て可視化したことについては、賛否が分かれた。

日本国内の開催に関する消極的意見の広がり配慮して、一部のスポンサーは、自らのスポンサーシップを宣伝、広報することを控えるという事例が生じたが、これが、今後のスポンサーシップの動向にどのように影響するかは、見極める必要がある。

国際的に見ると、参加国数については、各国パラリンピック（NPC）の存在する182カ国（2021年11月現在）のうち163カ国しか参加しておらず、ロンドン大会の164カ国と比較して参加率は増加していないが、これはコロナ禍の結果といえよう^{6,7}。

他方、ジェンダー別に見ると、選手全体の男女の比率は、ロンドン64.6%対35.4%、リオ61.4%対38.6%に比べて、東京は58.0%対42.0%であり、遜色ないと言える⁸。

一方、国際的格差の問題については、上位5カ国の金メダル占有率は、ロンドン45.5%、リオ51.8%に対して、今回は43.6%であり、若干改善されたとも言える⁹。

また、近年問題となっている選手の政治的主張の表現については、米国のボート選手チャーリー・ノーディングがかつての人種差別問題に関連してアピールした例があったが¹⁰、その他には例を見ず、パラリンピックを、こうした問題についての表現の場として用いる傾向は見られなかった。

次に今回の大会についての、メディアの報道ぶりを分析すると以下のような点が挙げられよう。

今回の2020大会についての日本のメディアの報道ぶりは、量も多く、また、内容も多岐にわたり、コロナ禍にもかかわらず、障がい者スポーツへの理解を深め、関心を高めることに貢献したといえよう。また、選手の経歴の紹介などを通じ、障がいやその克服過程について一般の理解も進んだと見られる上、競技の面白さや戦術等への解説もあって、熱心なファンの形成への一助となった。しかし、それだけに、問題点や今後の課題も浮き彫りになった。

第一に、新聞などのスポーツ欄での「夢の金」「悔しい銀」「連日のメダル」云々といったメダル獲得の強調と、社会面などでの障がいにつながる人間ドラマの叙述の相乗作用によって、かなりの選手が「スター化」され、あたかも、障がいという困難の克服は個人の努力と能力の問題であるとの側面が前面に出てしまい、障がいの克服には、本来、社会の変革こそが重要なのだとの面がいささか空念仏になってしまったとの見方もあり得よう。

第二に、わずかの例外（たとえば柔道、卓球における成績不振について、健常者団体との連携不足に言及した例など）を除き、金メダル20個、国・地域別メダルランキング7位という目標に全く届かなかった背景などへの批判的コメントがほとんど見られなかったことが挙げられる。これは、リオで金メダルが皆無だったことについて、批判的

記事、コメントが日本のマスコミではほとんど聞かれなかったこととあいまって、障がい者スポーツ報道にある種の「遠慮」があるのではないかとの疑念をあらためて起こさせるものであった。

第三に、成果を挙げた選手について、「人間の可能性の限界への挑戦」あるいは、「超人的成果」と言った表現が踊る結果、一般の障がい者の日常生活上の困難やスポーツ活動への躊躇の問題などが、ほとんど捨象された形になっていたことへの批判も存在した。

第四に、米国のボート選手が、表彰式で、10年以上前に郷里で起こった、警察官による黒人射殺事件の判決への抗議を表したTシャツを広げて訴えたことに、日本の報道機関は全く注目しなかったが、これは、障がい者スポーツの報道が、日本では、オリンピックとは異なり、政治的観点から議論されたことがないことを暗示するものでもあった。

最後に、2020大会では、必ずしも表面化しなかったが、今後、パラリンピックとの関係で、議論されねばならない点として、あらためて、再認識された問題としては、少なくとも、次のような点が挙げられよう。

第一は、競技におけるフェアネスの問題である。パラリンピックは障がいの様態や程度によって選手をいわゆるクラス分けし、競争条件の公正さを保とうとしているが、今回の大会では、コロナ禍もあり、クラシフィケーションの判定を行っていた国際大会の開催に困難があったため、2020大会の場においても、クラシフィケーションが行われたケースもあり、日本選手の例だけをとっても、陸上の伊藤智也選手など、参加予定だったクラスへの出場が叶わなかった選手もおり、今後、とりわけ開発途上国選手の大会参加に一層の困難を来すのではないかとの懸念が残った。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で、各国、各地で、選手の練習環境の優劣について格差が拡大したと見られるが、今後こうした「不公平」をどう考えるかの問題が残ったと言える。

第二に、いわゆる技術革新の影響の問題がある。近年、義足の走者オスカー・ピストリウスの高度に工夫された義足が、身体の機能回復ないし補完という「用具」の域をこえて、身体能力をできるだけ拡張し、超人化する「装置」になりつつあると見られたように、高度な技術を駆使した用具の使用の是非の問題が、指摘されてきた。もとより、こうした用具ないし装置はその活用自体に特別の能力、テクニックを要し、それだけに、そこに身体的リスクの問題も絡むが、こうした点を総合して、パラリンピックと用具の高度化をどのように扱うかは、今後の課題の一つであろう。

第三に、こうした点とも関連して、そもそも、パラリンピックは、特定の、いささか特異な競争条件をあらかじめ設定して競技スポーツを行う行事であるという見方も台頭してきている。すなわち、ゴールボールやブラインドサッカーのように、視覚障がいと

いう「条件」を公平に各競技者に課しているように、もともとパラリンピックは、肢体不自由、視覚障がい、知的障がいに配慮した特殊なルールを設定して行っている競技大会であるという見方をすれば、特殊なルールのもとでの競技の面白さを楽しむという感覚が観客に強まれば、障がいの克服や共生社会云々と言った理念を離れて、「スポーツ」あるいは「娯楽」として競技を楽しむという方向へ、パラリンピックが向かうということも考えられよう。

最後に、日本でも、パラリンピックあるいは障がい者のスポーツ、芸術活動などとの関連で、「感動ポルノ」の是非が議論されるようになった。すなわち、障がい者が障がいを「克服」してスポーツ活動などで成果を上げ、それが称賛されるのは、障がいを健常者の感動ドラマの「材料」に使用しており、裸体や性行為を感情高揚の材料に用いるポルノグラフィと同じような要素が見られるという見方である。この見方の是非は別として、そもそも、パラリンピックを組織、運営する者、観客、そしてそれを報道する者のほとんどは、いわゆる健常者であり、今や巨大な行事となったパラリンピックは、障がい者のためのものというより健常者のためのものになっていないかという問題意識自体は健全なものであり、今後課題を残すものともいえよう。

参考引用文献

- 1 IPC Historical Results Archive, "Paralympic Games," <https://db.ipc-services.org/sdms/hira>, (17 December 2021).
- 2 同上.
- 3 読売新聞オンライン, 「目標は『金メダル20個』, ゼロに終わったリオの雪辱なるか」, 2021年8月24日, <https://www.yomiuri.co.jp/olympic/paralympic2020/20210824-OYT1T50149/>.
- 4 日本パラリンピック委員会, 「過去の大会」, <https://www.parasports.or.jp/paralympic/what/past.html>, (2021年12月17日).
- 5 同上.
- 6 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会, 2021, 第48回理事会資料『東京2020大会の振り返りについて』, 11.
- 7 IPC Historical Results Archive, "Paralympic Games."
- 8 Ibid.
- 9 Ibid.
- 10 The Mercury News, "Oakland Paralympic Medalist Uses Podium Protest to Seek Justice for Oscar Grant," September 9, 2021.